
broken life

レモナー

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

broken life

【Nコード】

N2990P

【作者名】

レモナー

【あらすじ】

止まることを知ったのは、止まってからだった。

（前書き）

蓮花という人は、どんな人かと考えて綴っていたら、こんな世界が出来てしまった。

始めに見えたのは薔薇だった。

目の前で金色の薔薇が揺れていて、とげすら美しく見えた。

次に気付いたのは、自分が何かに掴まれていること。硬い金属が腕に食い込んでいること。

最後に見えたのは、泣き叫ぶ男。

叫び声の中で聞こえたのは、守りたかったの一言。

蓮花は重い頭を机から起こした。二日酔いに似た頭痛が走る。

大学の構内、人気の少ない図書館にいる。そう言えば、レポートの資料を探しに来たんだった。

ふと、手元の湯気の立つコーヒーが目に入る。見た目で解るが、ブラックだ。ミルクと砂糖がなければ飲めない自分が、これを持ってくるはずはない。

隣の学生の物かと思うと、自分の周辺には誰もいない。

仕方なく、図書館を出てカフェに向かった。本に囲まれた空間から出るのはものさびしい。

カフェは人でいっぱいだった。教授も来ているし、学生は講座の種類について話を交わしている。

知り合いがいなさそうなので、ミルクや砂糖の並ぶカウンターへ進んだ。そこで、それぞれ三つほどつかみ取り、泡立つのも気にせず、トポトポとコーヒーに注ぐ。

口を付けると、少し甘すぎた。もともと微糖程度だったのだろうか。今となってはわからない。

「蓮花、ここにいたのか」

瑞樹の声がした。確か寮の隣人だ。

彼女はシックなシャツと、体に合わせた黒いズボンをはきこなしていた。モデル体型と言う言葉のふさわしい、ラインがきれいなス

タイルをしている。

髪はワインレッドに染められ、肩のあたりで揺れていた。

「今日なんかあったっけ？」

私はその質問の意図にしばらく気付かなかった。

「蓮花、今日講座取ってないでしょ？」

「そうだった？ 今日は何曜日？」

瑞樹がチャツと腕時計を見る。髪の色に合わせた赤の革時計だ。

「水曜」

蓮花はそれを聞いて、自分がなぜ大学に来たのか忘れてしまった。腕にかかる重みでかすかに記憶がよみがえる。

「あ、そうだった。レポートが金曜に提出だから、資料を見に来たの」

瑞樹は呆れた顔をする。

「それ、提出先週でしょ？ 大丈夫なの、あんた」

不自然だ。自分は提出期限を破ったことがない。それに、日にちを間違えることもない。

蓮花はふらふらと席へ向かった。

瑞樹が後から、ドーナツの載ったトレイを持ちやってくる。

「主護にふられたからおかしくなったの？」

「誰、それ？」

「あんたが先週告白した男だろうが、まじで大丈夫？」

「駄目かも」

蓮花はコーヒーを飲み干すと、御馳走さまと呟いて、カフェをあとにした。

瑞樹はその後ろ姿を心配げに見つめる。

「また暴走しなきゃいいけど…」

大学の構内をどう出たのか覚えていない。気が付くと大きな駅にいた。随分と都会的だ。

駅名も目に入らず、よろめきながらホームに辿りつく。路線を頭

に描きながら、やってきた列車に乗った。

「……駅行きー……駅行きー」

肝心な部分が聞き取れない。しかしどうでもよくなった。財布を持っているかも知れないし、なかったらどうなるかも興味がない。

ただ、乗って辿りついたら下りるだけだ。

窓際の席が空いていたから、そこに腰を掛けた。トンと、頭を窓に預ける。過ぎてく景色が光みたいに速くて、何もわからなくなつた。

「あー、あー、誰か来て」

小さな声で言ってみた。誰も来ないと知っていながら。

「蓮花、お前何してんの？」

肩に置かれた手からして、低い声から判断して、男だ。聞き覚えのある声。

「圭護……？」

振り向くと、見慣れた顔があつた。ジャケットと、流行りのズボンははいてる圭護がいた。尖っている髪は、自由に伸びていて、それが余計に魅力的だ。

「お前、今日平日だし。何で県外に行こうとしてんだよ」

「え、これどこ行き？」

「……行きだけど」

やっぱり聞き取れなかった。

「ふーん」

「様子が変だな、お前。何かあつた……ってオレが訊くのは野暮か」
何のことだろうか。瑞樹が言っていたような気もするが、圭護に何をしたか覚えていない。

「とにかく、ぼうつとしてんなよ。オレ、バンドの仲間と来てるから戻るわ」

そう言つと、圭護は列車の無機質なドアに消えた。

「そう、じゃあね」

聞こえてないと知りながらも、言葉を贈った。

うでがむずむずする。何かが湧きでてくる感じがする。

「あ」

次に目を開けたら、列車は壊れていた。

脱線したような跡もあるが、音も衝撃もなかった。

自分が廃墟と化した、列車の一角にいることは分かっている。

周りは焦げくさく、多分火が回っているのだろうと見当が付く。

人の体はどこにも見当たらない。もう、みんな退避した後なのだろうか。自分だけ眠っていたから気付かなかったのだろうか。

怪我は何処にもしていない。割れたガラスの上に立っているのに、何処にも切り傷がない。

ただ、腕がむずむずしていたのが消えただけ。

「あー、あー、誰か来て」

今度こそ誰も来ないと思った。だから、ふらふら歩き出した。

「蓮花、まだそこにいたの？」

瑞樹だ。いつの間に此処まで来たのだろう。さっきと服装が違う。

「ちよつと、ちよつと。探したのよ。まさか一週間も行方不明になるなんて」

一週間。それはどのくらいだ、と思った。自分はずっと同じGパンをはいてるし、靴も大学で見たのと同じだ。何故私以外だけが変わったんだろうか。

列車事故はいつ起こったんだろうか。

「ねえ、蓮花。病院に行きましょうよ。見たところ大丈夫そうだけど、骨とか折っているかもよ。全くどれだけ心配したことか。無事で…よかったわよ」

無事か。自分は無事なのか。蓮花はぼうつと空を見た。

ぼうつとしちゃいけないと判っていた。こうしている間にまた世界が自分を置いていってしまうはずだ。判っていても、動けなかった。うでがむずむずした。

次に気付いた時、瑞樹はいなくなっていた。

列車の残骸には、錆びがこびりつき焦げくささもなかった。さつきは山中だったのに、今はどうやら荒地の真ん中みたいだ。また、世界に置いていかれてしまった。くるくるとまわりを見るが、音もしないし、風すら吹かない。

「あー、あー、誰か来て」

地震が来た。立ってられない位強い揺れが来た。それなのに、蓮花は悠然と立ち尽くしていた。誰も来てくれないのか、その喪失感が大きくて何も感じなかった。

足元が割れる。列車の残骸が悲鳴を上げる。砂が飛ぶ。

蓮花はぼうつとそれを見ていた。自分に何が出来なのか。立っていれば世界にしがみつけるとばかりに、立つだけだ。

「ああー、ああー、誰か来て」
夜が来た。

見慣れない研究室の中だ。自分はやっぱり立っていて、空気の味が変わっていた。

手に持っている物は、自分の皮だけ。頭に着いているのは、髪だけ。

「蓮花、無事でよかった」

白衣を着た瑞樹がいた。髪の色は紫になっている。それでも何の違和感もない。

自分はGパンを履いていて、見慣れた靴が下にある。

「ねえ、瑞樹。私は世界に着いていけないよ」

「大丈夫よ、蓮花。だから、落ち着いて」

落ち着く。何を落ちつければいいのか。うでがむずむずする。

「瑞樹い……」

音が響いている間に世界が暗くなった。研究室が無くなった。

瑞樹の最後の声がした。

「ごめんね、蓮花！。止められなかった」

何を謝られているのかさっぱり分からない。ただ、世界が発射してしまっただのは判った。

自分が立つのは、虚空の上。

ざわざわ風が吹いている。誰もいない。

「あああああ！ ああああ！ 誰か来て」

誰もいない。空気が止まる。誰もいない。

主護も瑞樹も同級生も誰もいない。

肩に重みがかかる。誰かの手だ。

振り返ると、手の形をした白いものが肩に乗っていた。骨と気付くのに時間はかからなかった。時間がかかったのは、骨に着いている指輪を何処で見たかと言うこと。

これは瑞樹のだ。

金色のおどろおどろしいハートが彫られている。

「だめじゃん、瑞樹い。無くしちゃ」

肩の手に、触れてみる。ごつごつしているけど、瑞樹の手だ。

「あれ、何で瑞樹の手が此処に骨になっているの？」

世界は応えてくれなかった。

目を閉じる。世界に追いつくために、歩いてみる。

感触の悪い地面を超えて、海みたいに音がする地面を超えて、草が柔らかい地面を超えた。何歩歩いたのか考えてみたが、千まで数えて飽きてしまった。

辿りついたのは、世界の端。

「ここが最後尾かあ」

目の前の切り取られた空間から出ないよう、そつと立ち止った。見渡す限り闇だ。

ざわつと風が吹く。うでがむずむずする。

「誰か、来て」

瞬きの後に見えたのは、金色の薔薇だった。

口付けしたくなるくらい、綺麗な薔薇が揺れていた。

自分の体が自由に動かせない。もがく気も起きない。

声が降ってきた。

「ごめん、蓮花。もう止まってくれ」

何のことだろうと思った。動けない自分に対して誰が言っているのだ。

蓮花は、目を閉じた。

ここが、どこかはどうでもいい。

世界に着いていかなきゃ。間に合わなくなってしまう。

「待ってくれ、蓮花！」

待つのは世界だ。

うでがむずむずした。

強制的に腕を掴まれる。

「これ以上世界を巻き込むな」

何のことだろう。誰の声だろう。

「圭護かぁ」

目を開けると、圭護がいた。涙にぬれた目をしている。

必死な顔をしてる。

「蓮花、自分がしていることに気付け。お前の力は大きすぎるんだ」

「なんのこと？」

「世界を巻き込むな。腕に支配されるな」

うでがむずむずする。ぼうつとしなきゃ。

カシンと音がした。腕が何かに拘束された。

振りほどかなければならない。ぼうつとすればいいのか。

「あー、あー、誰か来て」

圭護が消えた。

最後に一言。

「守りたかった」

世界が消えた。

やっと気づいた。

私が世界だったんだ。

誰もいない。

私は私と言う世界だった。

私が速かったんだ。

誰もいない。

みんなごめんね。

追いつきたかったのに、一人先行っちゃった。

自分の人生が世界と知らず。

誰もいない。

皆が消えて、やっととまれた。

誰もいない。

薔薇が枯れた。

「あー、あー、誰か来て」

誰も来ない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2990p/>

broken life

2010年12月13日21時02分発行